

見る聞く考えるやってみる授業

13



人間科 自分さがしの旅

広島工業大学附属中学校・広島高等学校教諭 野中春樹

本校では、中学1年から高校3年まで、年に3回、それぞれロングホームルーム3～4時間を使って「人間科」というオリジナル教科を実施しています。中学1年生から高校3年生まで「人が生きる」ことをテーマに学習します。学習は大きく「地球市民教育」と「進路教育」の二つに分けて展開されます。「人間科」の学習が最終的にめざしているのは、一人ひとりの子どもが彼らが生きる地域や世界での「生き方」を確立することです。そのために特に重視しているのは生徒

が「グローバルな視野」を身につけることと「自己開発」をすすめることです。グローバルな視野を身につけるということは、子どもたちが個人と地域・国・世界との関係を理解し、地球市民として生きる自覚が持てるようになることです。また、自己開発では、自分の生き方を探するために、セルフエスティーム(自己肯定感情)を高めたり、多様な考え方や価値観を持つ人々と協力して生きていくコミュニケーション能力を開発するワークショップを行います。

人間科の授業から
「わたしのせいじゃない」
責任について考える



対象: 中学3年生
 時間: 50分×3コマ
 ねらい: 苦しんでいる人や困っている人に対して、いろいろな言い訳をすることによってその人や問題に関わろうとしない心理的過程を明らかにすると同時に、言い訳ではなく、問題解決のために積極的に取り組もうとする意欲や能力を開発する。
 準備するもの: 紙芝居「わたしのせいじゃない」(発行/岩崎書店、文/レイフ・クリスチャンソン、訳/にもんじまさあき、絵/ディック・ステンペリ) 大気汚染、交通事故、戦争、難民、核実験など現代の地球規模の課題をテーマとした写真
 授業スタイル: グループワーク、ロールプレイ

① 紙芝居「わたしのせいじゃない」を見せる

授業の冒頭に生徒たちに一編の紙芝居を見せる。右の絵はその紙芝居の1枚目。クラスメートの前で一人の男の子が泣いている。どうやらクラスメートにいじめられたらしい。それに対して、クラスメートの一人は「学校のやすみじかんにあったことだけど、わたしのせいじゃないわ」と言って、言い逃れしようとしている。2枚目以降もクラスメートが一人ずつ登場し、はじめの子と同じようにそれぞれ自分の責任ではないことを主張していく。紙芝居の代わりに、実際に生徒たちが泣いている子どもを囲んで次々とことばを投げかけるロールプレイを行うこともある。



② 言い逃れ要因をさぐる

紙芝居に書かれている15通りの言い逃れの根底にある気持ちを各班に分かれて話し合い、短いことばで表現する。それを「言い逃れ要因」と名づけ、ワークシートに記入し、クラスで発表しあう。たとえば、「ぼくはこわかった。なにもできなかった。みているだけだった」という言い逃れの根底には「恐怖心」という気持ちが働いているのではないだろうか。あるいは「おおぜいでやったのよ。ひとりではとめられなかった。わたしのせいじゃないわ」という言い逃れは、「自分の無力さ」を理由に問題に関わることから逃れようとしていると考えられる。そんなふうにして、ふだん意識することのない言い逃れの要因をあえて意識化する活動をした。

<発表された言い逃れ要因>「軽蔑」「固定観念」「恐怖心」「量による論理のすりかえ」「はじめたのは自分ではない」「責任転嫁」「無関係」「無責任」「無関心」「排除」「みんなでやればこわくない」「逆ギレ」

広島工業大学附属
中学校・広島高等学校の
「人間科」で開発された
授業のカリキュラムテーマ。

	地球市民教育(共に生きる)	進路教育(生き方の探求)
中学1年	食べ物から世界が見える わたしメッセージを伝えよう	生きるってすばらしい
中学2年	ささえあう世界 - 障害者や高齢者と手をとりあおう 協力するって何だろう?	仕事と夢
中学3年	平和ってなんだろ? -- わたしたちにできること わたしのせいじゃない -- 責任について考える	仕事ウォッチング
高校1年	「性差」ってなんだろ? ちがいのちがいの -- 違いと差別について考える	社会人講演会
高校2年	国際化とは何か? 本当の豊かさとは?	何を学ぶの?
高校3年	明日への行動 - 地球市民として生きる	生と死を考える

③ 励ましのことばを考える

言い逃れの心理的要因をさぐるだけでは、生徒の今後の生き方につながらない。本当に大切なのは、困っている人や苦しんでいる人に、人間としてどう関わっていけるかということだ。次の活動として、「もし自分が紙芝居の中の状況におかれていて、言い逃れのことばを聞いたとしよう。そのとき、いじめられている子をなぐさめ、励ますために温かいことばをかけたとしたら、どのように表現するか。その励ましのことばを考えよう」と指示。

<励ましのことば>「何があったの、大丈夫?」「誰だって怖いよね。みんな自分のことしか考えてないよ」「止められなくてごめんね」「みんなひどいね」

「わたしのせいじゃない」
ワークシートの一部。

15通りの言い訳	言い逃れ要因	励ましのことば
学校の休み時間にあったことだけわたしせいじゃないわ。		
始まった時のこと見ていないからどうしてそうなったのかはぼくは知らない。		
本当はわたし見たの。だから知っているの。でもとにかくわたしのせいじゃないのよ。		
ぼくはこわかった。なにもできなかった。見ているだけだった。		
大勢でやったのよ。ひとりでは止められなかった。わたしのせいじゃないわ。		
大勢で叩いた。みんな叩いた。ぼくも叩いた。でもほんの少しだけだよ。		
始めたのはわたしじゃない。ほかのみんなが叩き始めたのよ。わたしのせいじゃないわ。		

④ 気づきカードの記入

生徒はここまでの授業で感じたことや思ったことを、気づきカードに記入。

<気づきカード>「励ましのことばは現実にはなかなか言い出せないと思う。そのことばが言えるようになると、その人が人間として成長したといえるのだろう」「泣いている人に対して、何が励ましになるのか、何が共感になるのかを考えるのはとても難しい。そのことばには責任があると思う」「傷ついたときは人から励まされても何も解決できないと思う。自問自答しながらでないと自分は変わらないと思う。人からでなく自分で答えが出たときに人は大人になっていくのではないか」

⑤ 6枚の写真から

「わたしのせいじゃない」、そんなことばを言いながら、直面している問題から逃避する。そういう状況は紙芝居の中だけのものだろうか? 言い逃れする代わりに励ましのことばを考えた生徒たちに、最後に大気汚染、交通事故、戦争、難民、核実験など現代の地球規模の課題をテーマとした6枚の写真を見せる。写真についての説明は何もしない。ただ写真を見て、何を感じたかを答えさせる。

<写真を見て>「一見自分には関係のないもの、他人がやったように思えることだが、それは時代が違ったり場所が違ったりするだけで結局は自分たちと同じ『人間』がしたことだ」「こういう問題を解決するにはどうしたらいいか、その答えは簡単には出ないと思う。ただ、わたしのせいじゃないという考え方は捨てて、わたしたちも含め、すべての人が考えていかなければいけないと思った」「なぜ写真のような状況になったのだろうか。このような状況になるまでに僕たちにできることはなかったのだろうか」



授業担当者から

紙芝居や写真を見て、必ずしもすべての生徒が同じように気づいたり感じたわけではない。しかし、生徒同士がそれぞれ気づいたことを発表し合うなかで、他の生徒のいろいろな考え方を学んでいったように思う。願わくは、生徒一人ひとりがこれからの人生の中で自分の責任をしっかりと果たし、また困っている人や苦しんでいる人に温かい手を差し伸べられる人間になってほしい。

「わたしのせいじゃない」プログラム授業は、荒川純太郎氏が開発したものを、野中教諭がご自分の教室に合わせて実践しているものです。

荒川純太郎氏は、「共生庵」 農・自然・人 の主宰者。学校教育や地域などで開発教育のファシリテーターとして体験型参加型のプログラムを紹介し、継続的に活動しています。